

養育者の被養育経験と子育てに関する研究ⁱ

—ポジティブな世代間伝達に注目して—

西村 奈都子ⁱⁱ・重橋 のぞみ

A study on Parent's Raising of Children And Bring up experience
— Adapting a Viewpoint of Positive Intergenerational Transmission —

Natsuko Nishimura・Nozomi Jyubashi

【問題・目的】

平成28年度の全国208カ所の児童相談所における児童虐待の相談対応件数は、12万2,578件と過去最多となる等（厚生労働省，2017）、虐待は深刻な社会問題となっている。この虐待と世代間伝達については多くの研究が報告されており、虐待の連鎖を断ち切るための対応方法、虐待の連鎖が生じる要因に焦点が当てられ、検討されている（遠藤，2010）。世代間伝達とは、「母親の幼少期における両親との間での経験が母子の相互作用に大きな影響を及ぼし、その特徴、性質、価値観等が子どもから孫へ伝達すること」である（林・横山，2010）。遠藤・数井（2007）らは、「親の愛着表象が安定したものである場合、その子どもの愛着も全般的に安定したものになりやすいこと」を示し、このような母親を持つ幼児は、「相互作用と情動制御の場面において極めて安定した特質」を示すこと、また「未解決型の母親を持つ幼児は相対的に母親との間で円滑に相互作用することができず、情動をポジティブな方向に調整することが困難で制御不能に陥りがち」であるという愛着の世代間伝達の実証を指摘している。また、田邊・米澤（2009）は母親自身の被養育経験との関連について検討している。その中で、母子関係が安定し受容的な被養育経験を有する母親は、「安定した自己モデルを持ち、自分の子どもとの関係性において受容的な関わりができる」が、母子関係に不信感があり情緒的に不信な被養育経験を有する母親は、「ネガティブな自己モデルを持ち、自分の子どもとの関係に感情的な関わりや、過保護、母子孤立といった不安定で一貫性のない関係性」を示しており、母親自身の被養育経験の世代間伝達を指摘している。さらに、内田ら（2010）も、母親自身が体験した被養育経験が、世代を超えて現在の自分の子どもに対する養育態度を規定する可能性が高いことを示している。

一方、ネガティブな被養育経験を持ちながらもポジティブな養育が行われた報告もある（林・横山，2010）。この研究では、ネガティブな被養育経験を持ちながらも適

切な情緒応答性を示す母親の特性が検討されている。被養育経験の伝達の認識とわが子への情緒応答性について、「ネガティブ・低群」「ネガティブ・高群」「ポジティブ・低群」「ポジティブ・高群」の4つの群に分け、自分の受けた子育てと自分自身の子育ての類似性を比較している。その結果、「ネガティブ・低群」の類似性は10～20%であったが、「ネガティブ・高群」の類似性は約半分であった。この結果から、「ネガティブ・低群」においては、伝達に対する認識が弱く、逆に「ネガティブ・高群」は、伝達してしまうことを強く意識していると考えられる。伝達への認識があるため類似性も高くなる一方、同じよう育てたくない部分への意識も強く、結果として半分の値となったと考えられる。これよりネガティブな被養育経験を強く意識すること、嫌だったこと、したくないことを意識することの重要性が示されている。つまり、母親自身の被養育経験を認識し、受け入れることが世代間伝達の連鎖を断ち切るために重要になると考えられる。

また山口（2006）は、自らの被養育経験がポジティブであってもネガティブな養育を行う可能性があることも示している。子どもに対して肯定的な養育態度の母親は、否定的な養育態度の母親より豊かなソーシャルサポートを受けている。過去に自らが肯定的な養育を受けていても、そこに子育てのサポートがなければ自らの養育はネガティブなものになる、というソーシャルサポートの必要性を示す結果であった。林・横山（2010）、山口（2006）らの研究は、世代間伝達は絶対的なものではなく、世代間伝達の連鎖を断ち切る可能性があることを示している。

ところで、世代間伝達の研究は虐待におけるネガティブな感情に注目したものが多く（遠藤，2010）。しかし、齋藤（2015）はネガティブな感情や経験が伝達されるのであれば、ポジティブな感情や経験も伝達される可能性を示唆している。姜・酒井（2006）は、受容された経験を基にすることで、何をすれば相手が喜ぶか、どうすれば相手のためになるか等、他者の立場に立った考え方が

i 本論文は、西村奈都子の卒業研究（2018年度）を加筆修正したものである。

ii 福岡女学院大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻大学院生

できることにつながると述べている。このことは、子育てをする時に自らの受容体験に注目することが子どもの立場に立って物事を考えることを可能にするといえ、斎藤 (2015) は重要な視点だと指摘している。子育て場面には、ポジティブな場面とネガティブな場面のどちらもある。そのため、支援を考える際には両側面を検討する必要があるが、両側面から世代間伝達を捉えた研究は少ない。日々の子育ての中で、親から受けネガティブな被養育経験だけではなく、ポジティブな被養育経験も伝達されるならば、ポジティブな被養育経験が活かされる可能性もあるだろう。世代間伝達を断ち切る支援を考える際には、ポジティブな伝達に着目した検討を行う必要があると考えられる。

そこで本研究では、母親の被養育経験によるタイプ別に、日々の子育てにおいてポジティブな被養育経験が活かされるかを検討する。なお、子育てはポジティブ・ネガティブの場面があるため、現在の子育て場面を問う際には、ポジティブ・ネガティブの2場面を設定する。場面設定については、大島 (2013) の「子ども本位な関わり」と「自分本位な関わり」、田邊・米澤 (2009) の「受容」、「過保護」を参考にする。

虐待は一部の限られた家庭での特別な問題ではなく、どの家庭においても起こり得ると考えられる。子育てを振り返ることから得られる結果は、虐待とまでは言わずとも、何らかい子育ての難しさに直面している養育者や次世代の子育て関係者の一助となると考える。

なお、以後は調査協力者を「養育者」と記載し、養育者の母親を「養育者の母親」と記載することで用語の使用を統一する。

【方法】

調査協力者 F県内の小学4年生以上の子を持つ養育者100名を対象に質問紙調査を依頼した。

調査時期 2018年10月から11月に実施した。

手続き 質問紙を直接手渡し及び郵送にて配布し、後日、返信用封筒にて回収し、73名を分析対象とした。

倫理的配慮 本研究は、調査目的、回答は無記名・任意であること、回答しないことで不利益が生じないこと、研究以外の目的で使用されないことがないことを質問紙に明記した。また、手渡しの場合は、口頭にて説明を行った。研究内容を十分に説明した上で、同意を得た協力者のみ調査を依頼した。

また、養育者の「現在の子育て」および「被養育経験」を想起して回答を求める際には、「ポジティブな経験」の想起に限定し、個人的なエピソードの記載をしないよう求めた。

質問紙の構成 質問紙は、(1) フェイスシート、(2) 幼少期(就学前)の母子関係尺度、(3) 現在の子育て中に想起される被養育経験の頻度、(4) 現在の子育て

中に想起されたポジティブな被養育経験の具体例(自由記述)で構成される。

(1) **フェイスシート** 性別、年齢、家族構成、子の人数、調査対象学年について記載を求めた。

(2) **養育者の幼少期(就学前)の母子関係尺度** 養育者自身の親との愛着タイプを分類する尺度である(酒井、2001年)。「あなたとあなたの養育者(母親など)との幼少期の母子関係についてお尋ねします」と教示した。「私は母親のそばで安心感があった」などの16項目、5件法で回答を求めた。

(3) **現在の子育て中に想起される被養育経験の頻度** 養育者の現在の子育てにおいて、自身の被養育経験を想起する頻度を尋ねた。子育て場面の設定は、先行研究(大島、2013、田邊・米澤、2009)の6項目を参考に用いた。教示は以下の通りである。養育者の子育てについて尋ね、「幼稚園・保育園時から小学校低学年までの小さな時を思い出してください。当時を振り返った時、下記のような子育て場面において、あなたがあなたの養育者(母親など)から受けたポジティブな関わり(被養育経験)を思い浮かべることがありましたか。あなたがお子さんに関わる際に、自分の母親から受けたポジティブな関わりを思い出した程度について(参考にした時、影響を受けたりなど)、場面ごとにあてはまるものに○をつけてください。回答は、「全く思い出さなかった」から「よく思い出した」までの5件法である。

(4) **現在の子育て中に想起されたポジティブな被養育経験の具体例(自由記述)** 上記(3)で回答した現在の子育て場面時に想起される自身のポジティブな被養育経験について、具体的例の記載を求めた。教示は、「あなたがお子さんと関わる際に思い出した、自分の養育者(母親など)から受けたポジティブな関わり(被養育経験)の場面や内容」を自由記述するよう求めるものである。倫理面への配慮として、上述した通り「個人情報の開示につながるような具体的」な内容を記載しないよう明記した。

【結果】

1. 養育者の幼少期(就学前)の母子関係タイプの分類

クラスタ分析(Ward法)を用いて養育者の幼少期の母子関係タイプの分類を行った。その結果、3クラスタによる分類が母子関係のタイプの特徴を最もよく表していると考えられた。次に、3クラスタを独立変数、安定型得点・拒否型得点・アンビバレント型得点を従属変数にした1要因3水準の分散分析を行い、各クラスタの特徴を確認した。各平均点および分散分析の結果を表1に示す。その結果、安定型得点、アンビバレント型得点、拒否型得点の全てが1%水準で有意であった(順に、 $F(2,70)=43.98$; $F(2,70)=33.29$; $F(2,70)=30.39$)。多重比較の結果、拒否型では全てにおいて有意差がみられ

表1 養育者の幼少期の母子関係—クラスタ分析の結果—

		クラスタ1 母子関係拒否群 n=22	クラスタ2 母子関係安定群 n=24	クラスタ3 母子関係安定・ アンビバレント群 n=27	F値	多重比較
安定型	M (SD)	19 (3.6)	25.75 (2.2)	25.26 (2.3)	43.98**	クラスタ1<クラスタ2・クラスタ3
アンビバレント型	M (SD)	10.19 (2.9)	11 (1.5)	15.15 (2.3)	33.29**	クラスタ1・クラスタ2<クラスタ3
拒否型	M (SD)	13.59 (3.2)	8.25 (1.5)	10.11 (2.1)	30.39**	クラスタ2<クラスタ3<クラスタ1

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

た。安定型では、第1クラスタと第2クラスタ、第1クラスタと第3クラスタに有意差がみられた。アンビバレント型では、第1クラスタと第3クラスタ、第2クラスタと第3クラスタにおいて有意差がみられた。

以上より、クラスタ1は、拒否型の得点が最も高く、安定型とアンビバレント型が低いことから、“母子関係拒否群（以後、拒否群）”と命名した。クラスタ2は、安定型の得点が最も高く、アンビバレント型と拒否型が低いことから、“母子関係安定群（以後、安定群）”と命名した。クラスタ3は、拒否型の得点は低いものの、安定型とアンビバレント型が高いことから、“母子関係安定・アンビバレント群（以後、安定・アンビバレント群と記載）”と命名した。

2. 養育者の現在の子育て場面

質問項目6項目について、主因子法による因子分析を行った結果、3因子が妥当であると判断されたため、因子数を3に固定し、再度の因子分析を行った（主因子法、

Promax 法）。結果を表2に示す。

第1因子は、「必要以上に子どもに干渉し、助言等を行う等、子どもに対して過干渉に接した」等、子どもに対して必要以上に関わってしまった場面であることから「ネガティブ場面因子」と命名した。第2因子は、「子どもと一緒に遊んだり、活動する場において、自らの母親のかかわりを楽しむような場面」等、子どものかかわりを自らが楽しみ、受容する場面であることから「ポジティブ場面因子」と命名した。

3. 現在の子育て中に想起される被養育経験の頻度 - 養育者の幼少期の母子関係タイプ別の比較

母子関係3タイプ（拒否群、安定群、安定・アンビバレント群）を独立変数、現在の子育て2場面（ポジティブ場面・ネガティブ場面）別に想起得点を従属変数として、1要因3水準の分散分析を行った。各群の平均点を表3に示す。

ポジティブ場面の各群の想起得点は、1%水準で有意

表2 養育経験の振り返り項目の因子分析結果

項目	F1	F2
ネガティブ場面		
必要以上に、子どもに干渉し、助言等行う等、子どもに対して過干渉に接した場面	1.01	-0.11
親の気持ちを優先しすぎてしまう等、親中心の子育てになっていた場面	0.64	-0.04
必要以上に子どもの世話に手を出してしまう等、子どもに過保護に接した場面	0.55	0.3
ポジティブ場面		
子どもと一緒に遊んだり、活動する場において、自らの母親のかかわりを楽しむような場面	-0.14	0.88
どんな時でも子どもの味方であり、子どもを愛している態度を持っているなど、子どもを受容する場面	-0.03	0.67
子どもが集団生活で問題にぶつかったり、自分の思惑を超えて行動したりした時に、C58その問題に精一杯対応すること等、子どもから与えられる課題へ対応する場面	0.21	0.65

表3 現在の子育て中に想起される被養育経験の想起頻度—養育者の幼少期の母子関係タイプ別の比較

	母子関係			F値	多重比較	
	拒否群 n=22	安定群 n=24	安定・アンビバ レント群 n=27			
現在の子育ての ポジティブ場面	M (SD)	2.45 (1.14)	3.6 (0.87)	3.05 (0.75)	8.87***	拒否群<安定・アンビバレント群<安定群
現在の子育ての ネガティブ場面	M (SD)	2.59 (1.19)	2.53 (0.86)	2.73 (0.86)	0.29	n. s.

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

であった ($F(2,70)=8.87$)。多重比較の結果、「拒否群」「安定群」「安定・両価群」の全てに有意差が示された。一方、ネガティブ場面の各群の想起得点では、有意差が示されなかった。

これより、ポジティブな子育て場面において、自らのポジティブ被養育経験を思い出す頻度は、母子関係「安定群」、「安定・アンビバレント群」、「拒否群」の順で高いことが示された。また、ネガティブな子育て場面においては、母子関係のタイプによって自らのポジティブな被養育経験の想起頻度に差がないことが示された。

4. 現在の子育て場面時に想起される養育者のポジティブな被養育経験（自由記述）の分類—養育者の母子関係タイプ別—

養育者の現在の子育て場面時に想起される自身のポジティブな被養育経験（自由記述）を分類した。分析対象は、73名中、回答を得た60名であった。分類は、筆者と心理学専攻の学生複数とで行った。分類困難なものは、協議して決定した。

記載内容より、分類は「養育者の現在の子育てにおける子への感情（以後、子への感情）」「養育者の被養育者に対する感情（以後、母親への感情）」「養育者に対する養育者の母親の行為（以後、自分に対する母の行為）」の3カテゴリーが妥当であると考えられた。各カテ

グリーはさらに小カテゴリーに分類された。カテゴリー名と記載例を表4に示す。

養育者の母子関係タイプ別の各カテゴリーの出現頻度（パーセント）を表5に示す。「子への感情」は、母子関係「拒否群」「安定群」「安定・アンビバレント群」全てのタイプにおいて、喜び、慈愛、苦悩のカテゴリーが上位を占めていた。特に「拒否群」は、苦悩が30%であり、「安定群」「安定・アンビバレント群」と比較して高い比率を占めていた。また、「安定群」「安定・アンビバレント群」は、上位カテゴリーに加えて、期待、満足等、感情のカテゴリーは合計で7種類であった。一方、「拒否群」は、喜び、慈愛、苦悩の3種類のみであり、「安定群」「安定・アンビバレント群」と比較してカテゴリー数が少ないという特徴があった。

「母への感情」は、感謝が「安定群」「安定・両価群」において70%、「拒否群」は47%であり、どの群も感謝の割合が高い結果となった。しかし、「拒否群」は感謝以外のカテゴリーである不満や反抗心、寂しさが約半数を占めた。一方、「安定群」「安定・アンビバレント群」では、寂しさは表現されておらず、「拒否群」のみのカテゴリーだといえる。さらに、「安定群」「安定・アンビバレント群」で分類された感動は、「拒否群」では分類されず、群によってカテゴリーに差があることがわかった。

表4 自由記述のカテゴリー名と例—現在の子育ての中で思い出した自身の母親から受けたポジティブな関わり—

番号	子どもに対する感情	母親に対する感情	自分に対する母の行為	例 ¹⁾
1	感謝			私が階段を登るのがつらかった時、子どもが「お母さん、手！」と言って手を差し伸べ、手を引っ張って階段を一緒に登ってくれました。
2	期待			私は子を優先し大切に育て、外遊びやスポーツをさせ、怒る時はちゃんと話を聞こうと思った。母は私を大事に育ててくれた大切な人であり、反面教師の部分の多い人でもありました。
3	緊張			私の幼少期、母がどんなに仕事で忙しくても、毎年運動会では手作りのお弁当を沢山作ってきてくれた。私も毎年手作りのお弁当を作っている。
4	苦悩			幼い時は母が忙しく余り構ってもらってなかった。両親は喧嘩をすることが多くそうならないためにどうするのかということを考えながら子育てしていたように思います。
5	慈愛			子どもを愛しているという点では同じだと思うが、母との関係を反面教師として、自分がして欲しかったこと、自分がやってあげたいことを子どもにしている。
6	不安			私に出来不出来をコメントされなかったから自分は肯定感が強いと感じる。自分は親からどのようにして育てられたのか、子にもそうやって欲しいのと思う時、先述のことを思い出します。
7	満足			母とは違った子育て、子どもとの関りをしていないのではないかと思います。いずれにせよ、母親は「そこに居る」だけで子どもたちは満足なのかな、と思います。
8	喜び			その日の学校でのことを母に話すことが楽しい時間で、母は料理をしながら聞いていたが、今、娘も沢山話をしてくれる。娘の話にはとても関心があり、しっかりと聞いて心に留めている。
9		感謝		子には絵具を使って自由に描かせたが、私も母の大好きな画家の絵を見てクレヨンで真似て描いて子どもなりに多少上手だったのか、母が壁に貼って褒めてくれたことを思い出した。
10		感動		子どもにおやつを作るの日課にしていた。母がとても大好きかつ自分もそうしてあげたいと思っておやつを作っていた。
11		敬意		子どもを叱る時に、自分の母親は子どもに対して酷いことを言わなかった、私は子どもに「こうすれば、ああすれば」と言い過ぎる所が母親に比べてあると思うこともあります。
12		寂しさ		忙しい母親に迷惑をかけないよう、何助けたいと、常に考えていた記憶があり、私を支えてのは叔母、祖母で、いつも大切に大事にされていた印象があります。
13		慈愛		階段を昇る時、私はよく母を待って一緒に手を繋いで、ゆっくり昇っていたことを思い出した。
14		反抗心		子ども達はよく公園に等に連れて行った気がするが全てにおいて自分の体験と逆のことをしてきた様に思う。唯一、ご飯を全て手作りしているという事だけ母の真似をしている気がする。
15		不満		蒸しパンをよく作ってくれ、蒸し器の蓋を開けるのがすごく楽しみだったのを覚えています。そのせいか我が子小さかった時は良く手作りのお菓子を作っていました。
16			特別な場面	普段は忙しく、遊んでもらったことは殆どないが、夏休みには必ず旅行に連れて行ってくれた。
17			日常受容態度	私は子どもと一緒に遊ぶが、幼少期に母のママさんバレーにいつも付いて行き、一緒に楽しんだことや家の前の道路で母と良くバレーボールをして遊んだ事を思い出します。
18			反面教師	自分の子育てにおいて祖母に褒められて嬉しかった記憶は深く影響していると思う、祖母は褒めて伸ばす、根気強く待つ、褒美をくれるそんな存在でした。

¹⁾ 文章は個別の内容が明示されないよう、原文を加筆修正している

表5 現在の子育て場面時に想起される養育者のポジティブな被養育経験（自由記述）の分類
—養育者の母子関係タイプ別—

		母子関係		
		拒否群 n=22 %(回答数)	安定群 n=24 %(回答数)	安定・アン ビバレント群 n=27 %(回答数)
子への感情	感謝	0% (0)	45% (1)	0% (0)
	期待	0% (0)	8% (2)	11% (2)
	緊張	0% (0)	0% (0)	5% (1)
	苦悩	30% (3)	13% (3)	17% (3)
	慈愛	20% (2)	33% (8)	28% (5)
	不安	0% (0)	4% (1)	5% (1)
	満足	0% (0)	0% (0)	6% (1)
	喜び	50% (5)	38% (9)	28% (5)
母への感情	感謝	47% (8)	71% (17)	71% (20)
	感動	0% (0)	13% (3)	4% (1)
	敬意	0% (0)	8% (2)	11% (3)
	寂しさ	12% (2)	0% (0)	0% (0)
	慈愛	0% (0)	4% (1)	0% (0)
	反抗心	23% (4)	0% (0)	7% (2)
	不満	18% (3)	4% (1)	7% (2)
母の行為	特別な場面	27% (4)	17% (4)	9% (2)
	日常受容態度	27% (4)	83% (19)	82% (18)
	反面教師	46% (7)	0% (0)	2% (2)

「自分に対する母の行為」は、「安定群」「安定・アンビバレント群」において、日常受容態度のカテゴリーが全体の8割以上を占めていた。一方、「拒否群」では反面教師が約5割と最も多い割合を占めていた。「拒否群」も日常受容態度と特別な場面の回答があったが、その割合は3割程度であり、「安定群」「安定・アンビバレント群」とは割合が異なっていた。

【考察】

1. 養育者の幼少期（就学前）の母子関係タイプの分類

就学前の母子関係尺度（酒井,2001）を用いて、クラスタ分析を行った結果、3クラスタが抽出された。先行研究では、母子関係が「安定型」「拒否型」「アンビバレント型」に分類されることが多いが、本研究では「安定群（24名）」「拒否群（22名）」に加え、「安定・アンビバレント群（27名）」の3タイプに分類された。

表1より、安定型得点において「安定群（平均25.75）」と「安定・アンビバレント群（平均25.26）」には有意差が示されなかったことから、「安定・アンビバレント群」も「安定群」と同様に母子関係に安定性を保っている群と考えられる。一方、アンビバレント型得点においては、「安定群（平均11.00）」と「安定・アンビバレント群（平均15.15）」の間に有意差が示されたことから、「安定・アンビバレント群」は、母子関係において安定性を示しながら、高いアンビバレント性を併せ持つ特徴があると言える。「安定・アンビバレント群」は全体の3分の1以上であり、一定数が該当した。フェイスシートから、この群の約70%が40歳代の女性であることが分かっ

ている。この年代の母親は概ね60～70歳代位と想定されるが、母子関係のスタイルにも変化が生じている可能性もある。近年、母親との対立や葛藤を強めている娘が増加しており、その背景には娘に対する母の過剰期待があると言われている（柏木, 2013）。今回の調査協力者の世代にも、母子関係は安定しているものの、娘である自分自身に対する母親の過剰期待を感じやすい層が含まれていた可能性もある。「安定・アンビバレント群」のような安定性と同時にアンビバレント性を持つ母子関係は一定数存在すると考えられる。

なお「安定・アンビバレント群」も含めると母子関係において安定性を示す群は合計で51名、全体の70%であった。これより、今回の調査協力者は、母子関係が安定した対象が多く含まれていたといえる。母子関係が安定している養育者の過去のポジティブな被養育経験の活用は、「安定群」「安定・アンビバレント群」の結果を、母子関係が不安定な養育者の被養育経験の活用は「拒否群」の結果から、検討する。

2. 養育者の現在の子育て場面の分類

子育て場面の6項目の因子分析を行い、「ポジティブな子育て場面」「ネガティブな子育て場面」に分類された。「ポジティブな子育て場面」は、子どもと一緒に遊ぶ、楽しむと言った「共に楽しむこと」、子どもが問題にぶつかった時に対処する「課題へ懸命に取り組むこと」、そしてどのような状況下でも子どもの味方であることを表現する「子どもの味方を貫く姿勢」から構成されていた。このような場면을親として「ポジティブな関わり場面」と捉えていると言える。一方、「ネガティブな子育て場面」は、子どもへ必要以上に関わる「過保護な養育」、

子どもの気持ちよりも親の気持ちを優先する「親本位な関わり」、子どもに対して干渉や助言が必要以上になってしまう「過干渉な養育」から構成されていた。このような場面を、親として「ネガティブな関わり場面」と捉えていると言える。

2 場面の違いは、「子ども本位な関わり」か「親本位な関わり」の違い(大島, 2013)、「受容」か「過保護」の違い(田邊・米澤, 2009)である。本研究では、子どもを主役にして受容する関わりを「ポジティブな関わり場面」、子どもへの思いが強く過保護となり親が主役となる関わりを「ネガティブな関わり場面」として検討する。この結果は、研究開始時に想定していた「ポジティブ・ネガティブな子育て場面」と一致した結果である。

ところで、両場面とも親として子どもに懸命に向かい合う関わりであり、子どもを見放す内容ではない。日常の子育てにおいては、両場面の境界を行ったり来たりしつつ、日々迷いながら子育てを行う母親も多いと考えられる。

3. 現在の子育て中に想起される被養育経験の頻度—養育者の幼少期の母子関係タイプ別の比較

分散分析の結果、「ポジティブな子育て場面」では、母子関係タイプによって、養育者自身のポジティブな被養育経験の想起頻度に差があった。ポジティブな被養育経験を最も想起しやすい群は母子関係「安定群」であり、次に「安定・アンビバレント群」、最も想起が少ないのは母子関係「拒否群」であった。本研究におけるポジティブな子育て場面とは、子どもを主役にして受容する関わりである。このような関わりが大事なことは理解できているが、日常の中では冷静になれない場面も多く生じるであろう。その際、母子関係「安定群」は、自分が母親から育てられた際に受けたポジティブな被養育経験を想起し、対応していると考えられる。

また、母子関係「安定・アンビバレント群」は「拒否群」よりも、ポジティブな被養育経験を想起していた。これより、養育者自身の母子関係の安定度は、わが子へのポジティブな関わり、すなわち子どもを中心に受容的に関わろうとする際に、自分が受けたポジティブな被養育経験を活用する程度に影響するといえる。この結果は、ポジティブな被養育経験が次の子育てに活かされることを示唆している。これより、ネガティブな被養育経験が世代間伝達されるだけでなく(遠藤・数井, 2007; 林・横山, 2010)、ポジティブな被養育経験も世代間伝達されることが明らかとなった。これは、ポジティブな感情や経験も伝達される可能性を示唆した齋藤(2015)の提言と一致する。

自分が受容された経験が基になり、何をすれば相手が好きか相手のためになるかなど、他者の立場に立った考え方ができることを姜・酒井(2006)が指摘している。自分にとって最も身近な親から「自分が受容されている」という体験を繰り返し積み重ねることは、他者を思いや

る行為に繋がる。自分がされて嬉しかったことは、同じようにしてあげたいという思いは、子育てにおいてわが子に向かい合う時にも自然と生じるであろう。ポジティブな被養育経験が世代間伝達され、自分が受容される感覚を子どもが持つことができれば、結果的に母子関係の安定性につながると考える。

このように、養育者の中に子育てのヒントが蓄積されており、活用しやすい状況にあることが、母子関係の安定度によって被養育経験の活用に差が出る要因の一つだと考えられる。被養育経験の活用のしやすさに差が生じる要因については、さらに検討が求められる。

一方、「ネガティブな子育て場面」では、養育者自身のポジティブな被養育経験の想起頻度に母子関係タイプによる差はなかった。つまり、「ネガティブな子育て場面」ではどの母子関係タイプも同程度にポジティブな被養育経験を想起していたといえる。本研究におけるネガティブな子育て場面とは、親が主役となり子どもに過保護に関わる内容である。このような親中心の関わり場面は、養育者自身への自己注目が高くなり、余裕を持った関わりが困難になりやすいと考えられる。そのため、ネガティブな子育て場面においては、たとえ母子関係「安定群」であっても、自分が母親から育てられた際に受けたポジティブな被養育経験を積極的に活用することが難しいと考えられる。

4. 現在の子育て場面時に想起される養育者のポジティブな被養育経験(自由記述)の分類—養育者の母子関係タイプ別—

調査協力者が自分の子どもに関わる際に思い出した、母親からのポジティブな被養育経験を分類した結果である。大カテゴリーは、「子への感情」「母への感情」「自分に対する母の行為」であった。

「子への感情」では、母子関係「拒否群」の分類に特徴があり、苦悩が3割と高い比率で占めていた。これより、母子関係「拒否群」は、子育てにおいて何らかの困難を抱えていると考えられる。

「母への感情」では、母子関係「安定群」「安定・アンビバレント群」において感謝の割合が7割を占めており、母子関係「拒否群」でも約5割を占めていた。これより、ポジティブな被養育経験を問われた際に、感謝を感じるエピソードが想起されやすいこと、また「拒否群」であっても母親への感謝の気持ちを有していると言える。子育ての中でその難しさを経験し、自らの母子関係を振り返ることもあるであろう。母子関係に不満や不安を抱きやすい「拒否群」であっても、子育てを通して自分の母親に対する感謝の思いを抱きやすくなる可能性も考えられる。しかし、「拒否群」は感謝に加え、不満・反抗心と言った対人方向が敵対の情緒(齋藤, 1990)や、寂しさと言った対人方向が悲哀の情緒が5割以上を占めていた。これより、「拒否群」は母親に対して感謝の気持ちと同時に、敵対や悲哀と言った感情を併せ持ってい

ると考えられる。

「自分に対する母の行為」では、母子関係「安定群」「安定・アンビバレント群」において、日常受容態度が全体の8割以上を占めていた。日常受容態度とは、一緒に料理をしたことや日々の会話等、日常の生活場面での出来事である。これより、特別な出来事ではなく、日常の生活場面での出来事が母親から受けたポジティブな養育経験として想起されるエピソードの多数を占めていると言える。

一方、母子関係「拒否群」では、反面教師が全体の約5割を占めていた。この結果は、ネガティブな被養育経験を持ちながらもポジティブな養育が行われた報告(林・横山, 2010)と一致する。母子関係「拒否群」は、自らが受けた養育経験をポジティブとは捉えられず、被養育経験を反面教師として自らの子育てに重ねているのであろう。つまり、ネガティブな被養育経験として自らの中に存在していたものをそのまま伝達するのではなく、ポジティブな養育へつなげようと試みている可能性がある。さらに、「拒否群」は、日常受容態度と特別な場面の割合が約3割と同数で、日常の生活場面の想起同様に特別な場면을想起していた。母子関係が不安定な「拒否群」は、日常の生活場面では拒否的な関係が強いため、毎日の生活の中で繰り返される受容的な日常場面ではなく、家族旅行など印象深い非日常のポジティブな出来事が想起されやすいと考えられる。

5. まとめと今後に向けて

本研究では、養育者自身の母子関係をタイプ別に分け、自らの子育て場面において、自身のポジティブな被養育経験がどのように影響を与えるかを明らかにした。母子関係は、「拒否群」「安定群」「安定・アンビバレント群」の3タイプに分類された。ポジティブな子育て場面では、母子関係「安定群」「安定・アンビバレント群」「拒否群」の順で、ポジティブな被養育経験を活用しやすいことが示された。一方、ネガティブな子育て場面では、タイプ別にポジティブな被養育経験は影響されることが明らかになった。

現在、虐待は大変深刻な社会問題となっている。虐待を断ち切るためには、ネガティブな世代間伝達の連鎖を断ち切ることが重要である。研究結果より、ポジティブな子育て場面では、ポジティブな被養育経験が伝達されること、また伝達のしやすさは母子関係の安定性の程度が関係することが示された。ただし、「拒否群」の想起頻度は3タイプの中で最も低いが、平均値は2.45であることから全く想起していないわけではないことがわかる。また、具体的な想起内容の分析では、「拒否群」も自身の母親に対する「感謝」の気持ちを記載していることを示された。すなわち、母子関係が不安定な「拒否群」も自分が受けたポジティブな被養育経験を活用できる可能性がある。このことは、虐待の連鎖を断ち切るために重要な視点になるであろう。今後、「拒否群」のポジティブ

な被養育経験の活かし方および活かさない要因に関する検討が求められる。

また、母親からしてもらった行為として想起されやすい内容は、日常生活の中で繰り返される毎日の些細な関わりであることも注目すべき点である。ポジティブな被養育経験の世代間伝達には、“何か特別なこと”が必要なのではなく、一緒に料理するなど、日常の受容態度が大切だといえる。

日々の子育ては、ポジティブな場面もネガティブな場面もあり、両側面を見ることが重要である。虐待に至らずとも、何らかの子育ての難しさに直面している養育者や次世代の子育て関係者の支援を考える時、「ポジティブな被養育経験の世代間伝達」に光をあてることが今後求められる。

付記

本研究にご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 遠藤利彦 2010 アタッチメント理論の現在—生涯発達と臨床実践の視座からその行方を占う— 教育心理学年報 49, 150-161.
- 遠藤利彦・数井みゆき 2007 アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 1-58.
- 林裕美・横山恭子 2010 ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について—一負の世代間伝達を断ち切るために— 上智大学心理学年報 134, 34-42.
- 柏木恵子 2013 おとなが育つ条件—発達心理学から考える— 岩波書店 137-138.
- 姜信善・酒井えりか 2006 子どもの認知する親の養育態度と学校適応度との関連についての検討 富山大学人間発達科学部紀要 1(1), 111-119.
- 厚生労働省 2017 平成27年度児童相談所での児童虐待相談対応件数等<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html> (2017年8月17日掲載)
- 大島聖美 2013 中期母親の子育て体験による成長の構造：成功と失敗の主観的語りから お茶の水女子大学大学院 1, 22-32.
- 齋藤舞 2015 世代間伝達について ヒューマンサイエンス 18, 98-100.
- 齋藤勇 1985 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 56(4), 222-228.
- 田邊恭子・米澤好史 2009 母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達—母親像に着目した子育て支援への提案— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 19, 19-28.
- 内田利広・山口美穂・河合三奈子・大田千登世・大東映美 2010 日本における内的作業モデルに関する研究の現状と今後の展望 京都教育大学紀要 117, 99-114.
- 山口淑子 2006 母親における養育態度と自身が受けた養育態度との関連について 龍谷大学大学院文学研究科紀要 28, 16-35.

